

長 著 短 著

○腦や胃や、肺や、皆わが有なり。われ人の身の疾患は、古の所謂地下の民の、其領主に叛けるが如きか。藥劑は兵なり、みだりに動かす可からず。牛乳を與へ、鶏卵を與へ、くさぐさの滋養物を與へて、以て政の仁なるものと爲すと雖も、要するにこは一時の安きを儉むのみ、欺くのみ。わが有にしてわが命に聽かず、誅せずして可ならんや。

○われ久しく治法を誤りて、天下何の處か波立たざるべき相模の濱に、死にもやらず、生きもやらぬ身の今も猶漂泊へり。こゝに醫の言を斥けて、再び筆を把りて文場に見えんとす。病は抗すべし、抗せしむべからず、是れまことに最後の鐵歴也。題して長者短者といふも、われに在りては太平の歌なり、祝詞なり、さりとはつらき東雲のストライキ節の如きものなり。憚りあれや、他を規せんとにはあらず、自ら諷せんとのみ。隨感隨錄斯くして無爲を耕はんかな、あゝ斯くして長くわれは無爲を耕はんかな。

○傳へて朽ちざるもの、日本に都々逸あり。中に曰く、頭禿けても浮氣は止まぬと。何ぞ夫れ人の老を窮追し、窘迫するの太甚しき。われ思ふに毛髮は、天に對する租税なり。喜ぶにつけ一本、悲むにつけ一本、苦樂の何れにつけても一本一本、其全く徴收せられたる時、即ち叫に謂ふなる頭の禿けたる時、天は徐るに之を地に引渡さし給ふにはあらぬか。

○剃りたる頭、禿けたる頭、すべて毛の無き頭を叩いて、これに免ぜよといふが如きは、多少の因縁なきにあらず。但し止まぬ管だよ先のない時にも、依然として禿げざる頭の脱税者なるや否やは、別箇の問題に屬す。

○古色をたゞへても若然といひ、暮色をたゞへても亦若然といふ。語の妙は盡くるなし、嘗て骨董亡國論をきまぬ。
○定めなきを果敢なしといはゞ、美術品といふものの價こそ、空蟬の世にも果敢なき極みなれ。作れりし人は既に去りて、藏せりし人の之を賣らんとするに、買はんとする人々の競合ひて、

著しき昂騰を見ること、歐洲にも其例尠からずとよ。美術品の價値は、破産によりて生ずる價値なり。

○鶴沼よりしたるわが手束の一節を、下に抄記すべし。『今の紳士の別荘を愛し候は、美術を愛し候と同じく、其眞意義、其眞趣味を解し候にあらざりて、其物、其地の時價を解するに止まり候。』われは敢て其高貴が故、安いが故の如何に迄言及せず。

○巖に三猿伯の各地を回りにて、大に節儉を徳説するや、先づ生平愛惜せる金屏風を售らんとせりきと。其後の事は知らず、されども若之を購ふ者あらば、折角なる伯の徳説は同時に破れたるにひとしからずや。大方の折に節儉とは、おのれ一人を戒むるものにあらず、他人を陥るゝものなり。

○犯さんがために法律あり、破らんがために道徳あり。犯す者、破る者なくば、何の日か法律、道徳の効果を表顯し得ん、發揚し得ん。今や法律の完きは紙の上及び、道徳の遍きは舌の先及び。法律は墨の濃れたるなり。道徳は唾の飛びたるなり。擧がらざるなく、備はらざるな

きを名けて、新時代といふ。

○其要とする所、道徳は粧飾也、法律は洒掃也。粧飾、洒掃、共に早く市中の商社業たり。

一は損料を以てし、一は請負を以てす。美麗ならざるを得ず、清潔ならざるを得ず、更に大に文明ならざるを得ず。

○潜らば頭觸るべし、潜る可からず。跨がば足觸るべし、跨ぐ可からず。道徳といひ、法律といふ、元是れ一條の繩の杭より杭に張られたるなり、牽かれたるなり。飛越すべし、鶻地に飛越すべし、身を挺でて飛越すべし。支配すといへど、束縛すといはず。

○法律は人恐れて然かもこれに近づき、道徳は人敬ひて然かもこれを遠ざく。其矛とするに宜しく、盾とするに宜しきは、兩者相同じ。

○よく思はるゝも誤解也、辯ずるものなく、わるく思はるゝも誤解也、黙するものなし。誤解は俚物を出し、愚者を出す。徒らに眞價の有無を云々するが如きは、誤解が治國の大本なるを知らざるものなり。

○されば下利の玉に哭する、三日三夜。何はさておき、腹の減つたことなるべし。

○渴ぐがごとくわれの望みて、未醫するに至らざるもの二つ。日々に見る新聞廣告は、殊にこ

の感をして深からしむ。曰く利かぬ藥、曰く賣れぬ本。

○藥として利かざるは莫し、議員ある所以。本として賣れざるは莫し、藝者ある所以。是亦新聞紙の證明する所也。

○讀んで字の通りといふことあり、彈丸硝藥是騰差、分捕事件は多く争ふの要なし。

○幾たび落すも、舊の膽也。幾たび潰すも、舊の膽也。將又幾たび抜かるゝも、猶儼として舊の膽也。こゝに於てか肝膽は、長へに相照し

もすべく、月照しもすべし。膽は其狀、其質、素用護襪鞣に似たるものなり、おもちやなり。世上別に紙風船の製あり。

○豆腐は豆腐よりも硬くするを得べし、蒟蒻は蒟蒻よりも軟かくするを得べからず。煮炙は感化なり。感化は豆腐に施し得べきも、蒟蒻に施し得べからず。

○措けよ論者、みだりに志をいはんは危からずや。今の弊は、志無きより生じたるに非ず、各人各箇、志の有り過ぎるより生じたるなり。

○月日は洗濯菴達の如し、垢も虱も罪も穢れたるなり。

も、夢より早く除き去ること妙也。星霜を經つといへる省筆上の重寶は、音に史家、作家にのみ占せしむ可きにあらず。

○海の内外をいはず、民とし民の數多くは、自國の文典を辨へざる者なり。

○枯淡閑寂、之をサビと稱す。サビは土鍋のみ、菜と粥とのみ。風流を以て牛肉、豚肉の看板を律せんは誤れり。

○飢を忍ぶの心ありて、風流は纔に會得せらるべし。悟りは斷食也。

○仁義はヒソメキ也、肉食のひそめき也。富強はドオメキ也、肉食のどよめき也。後に涙あり、彼れはいよゝゝ瘦すべく、前に笑あり、此れはいよゝゝ肥ゆべし。人道を説く、難からずとせず。況んや坐ながらなるに於てをや。

○自ら行ふを得ざる時、忽ち椽大の筆を揮つて、高論清議なるものを出す。われには許せ敷鳥の道、これも人の癖なるべし。

○俗に草見を和けて、できない相談と訓す。惜みても惜むべきは世の何ものをも、胃の腑の咎に歸する志士仁人の、やつぱり胃の腑を有する事なり。

○梨減す鏡の朝、紅鎖す燈の夕、花に濺ぎ月に濺ぐ、涙は斯く種々なるものなれども、一

滴もこぼさざる涙の言現すべき術なきにより、假に之を萬斛の涙とは呼做すとぞ。

○政界、文界、サ、法界の何れと限らず、日々聞視する所のものを以て、この世直ちに可笑しと人の言はど、われ亦然りと言はん。されども其可笑味や胸底に非ず、鼻端也。あはくに非ず、ふん也。畢竟明治は話談の料に富みて、記録の材に乏しき時なり。

○鎖さぬ御代といふものありき。九尺二間に戸の一枚なりしにもあらず、戸の無かりしにもあらず。

○大路駈行く黒漆車の、聲荒らかに叱咤するに遭ふとも、必ず振仰ぎて癢にさへたまふ勿れ。曳ける人の苦痛と、乗れる人の苦痛と、即ち二箇の苦痛を掲げて急ぐ者なればなり。曳ける苦痛は一時なれども、乗れる苦痛は永遠なり。

○一面の繁榮は、一面の危険也。繁榮の都は、危険の都也。東京市の膨脹は、寄留籍の膨脹也。

○頗る恰當ならざるが如くにして、頗る恰當なるが如きを覺ゆるにより、われは茲に觸接なる文字を拈出す。觸接は虚偽を生む、只これ

だけ也。面と面と、手と手と、すべて觸接を重ぬるは、虚偽を重ねる也。有形無形を別たす、男女を別たす、交際の義と知るべし。

○事有れば愚癡の爲替也、事無ければ自慢の爲替也。彼我の愚癡と自慢との取組高を、月末、若くは年末の帳尻より差引すれば、交際はゼロ也。不必要也。冗漫の手敷也。まぢがつて損を見るも、益を見ることなし。

○我を揚げ、我をたゞへんが爲に友は存在する者にあらず。我を抑へ、我をそしらんが爲に存在する者なり。

○友は心さびしき時、懐つめたき時、つまりお金のほしいやうな氣のする時、互ひに一寸小當りに、當り合ふものなるに過ぎず。

○慈悲は一種の醉狂也。手近くは之を途上に看よ、一文二文の微かの投錢も、老女の破れ三味線に薄くして、幼童の阿房陀羅經に厚きにあらずや。

○明朝米を買ふの錢は工面するに難く、今宵女を買ふの錢は算段するに易し。上下誰しもの事なり、誰とおもはど實驗すべし。

○青年は青年也、顔の青きに止まらず、一切に

於て青き也、菜の葉也、來もせぬ蝶を夢る也。白粉のためなるも、活字のためなるとあれど、いづれは鉛毒の結果に外ならず。

○夢ならずば醉也。青年は或意味の醉漢也。酔つて葉の如く青きもの、醒めてます／＼青かるべし。どうしたとても青二歳也、醉生夢死也。中に雜誌の一篇も書かうといふお方は、甚だ見上げたものなるべきにより、姑く例外とす。

○渠等が夢の一つは歴史的也、奈勃翁也。他の一つは神史的也、丹次郎也。これ即ち壯士と猪丁とある所以、鞭聲肅々と梅にも春とある所以、新聞記者にも硬軟の稱ある所以。丹次郎は度すべし。奈勃翁は度すべからず。

○今の青年は縁雨を好まず、縁雨は今の青年を好まず、お互ひ様なり。書肆の語る所によれば、地方向青年ならざれば賣行よからずと。されども縁雨は都に俟つ、地方に俟たず。一人前の者に俟つ、青年に俟たず。たゞ少しく困るといふは、縁雨ももも地方人にして、今の青年なる事なり。

○抱負の大きよしあし也。わが胸に置くに堪へずして、ひとの耳に置くに至る。精力は手に非ず、口也。性根に非ず、面附也。

○歳の五月、われは小高きに登りて、夥しく

も樹てられたる町々、家々の吹流しを觀る毎に、先づおもへらく此健兒あり、帝國の將來を祝せざる可からずと。次で又おもへらく此鯉あり、皆の揃つて龍になるでもなきを祝せざる可からずと。

○一たび生を斯世に享く、希はくは酸き甘き、苦き辛きの限りを嘗めんか。十九二十にも足らぬ女の丸鬘は、この點より見る不幸の目標也。赤きてがらは疾々之を急立て、墓地に送るの造花也。身は已におもひ切髪、男になれるよりも果敢なし。

○白魚たりともあさましきは、俄人も言へり。腹ふくよかに袖にも掩されぬを抱へて、人馬稠き間を縦行く姿ばかり、世にあさましきは無かるべし。賢も不肖も、手を束ねて斯くなり能ふべき道理なければなり。

○其勢力や、其時日や、民人の義務且權利也。家運、國運を増進するの法、また多岐なるかな。
○流寓といふを知らざる女は、無用の長物なりと信ず。
○人は鳥ならざるも、能く飛ぶものなり。獸な

らざるも、能く走るものなり。されども一層、適切なる解釋に從はば、人は魚ならざるも、能く泳ぐものなり。

○利口さうなると、正直さうなるとは、人間遊泳の極意也。一般社會は此さうなるを以て、信用の基礎となすもの如し。利口なるなかれ、正直なるなかれ、凡てに語尾の明確ならんは、溺没をまねくに始かるべし。

○眞人間無きにあらず、眞人間の世を渡るもの無きのみ。紅塵青史、利を競ひ名を争ふ、眞人間の堪ふる所ならんや。勳位あり、爵祿あり、洋劍あり、算盤あり、石門鐵壘の敵めしきあり、強ひて眞人間を作るの要あるを見ず。

○忽ち曰ふ、眞拳なれと。こは己に責むべき事也。他に責むべき事に非ず。よしわれはわがマジメを藏するも、むやみに人様に御覽に入れんとは思はず。
○故にわれの酒客と談ずるを欲せざるは、酒を欲せざるのみならず、實に其人、其談を欲せざるなり。わが知れる限りを以てすれば、酒客は早速本心を申上ぐる者なればなり。手中一箇の盃に代へんには、餘りに惜しきわが命なればなり。

○飲んだ話をする奴は、飲まぬ奴也、飲みたい奴也。當世の事、酒を經ざれば友にあらず。○流行はわれに來らず、われは流行に恃まず。恃まざる流行のわれに來るものは、感胃のみ。

○若よく人言を容るゝ者あらば、其病時なるを察すべし、加持も、祈禱も容るゝ時なるを察すべし。

○醫者殿より健勝を賀し奉らるゝは、方丈様より開端を賀し奉らるゝと同じく、弔意を以て慶辭を受取る可からず。因果はめぐる小車の、やがての後は逆まの世や、慶意を以て弔辭を受取る可からず。

○いつも變らず健康ならんをねがはば、頸の運動を怠るべからず。頸の運動は即ちおじぎ也、おじぎは即ち滋養品也。長上に對する報告の過半は、おじぎを以てすべきこと、夙に一世の知悉する所也。
○天職とは我自ら壽命を切りこまぎきて、本町に運ぶの謂也。神聖なる文學圖ともいふものを編製すべくば、日本橋區本町三丁目は、これら諸大人の咽喉を扼するの地也。博文館も本町三丁目なれば、金港堂も本町三丁目なり。
○新に文藝界なる大冊を得て、われは測らずも神を呼びぬ、作家は猶猶死すべき時にあらざる

をおもひて。
○多くの雑誌の末期に見れば、雑誌は作者を毒し、讀者を毒し、然り而して發行者の懷中を毒するものなり。

○時は梅に繼ぐに櫻を以てし、身は貧に繼ぐに病を以てす。近日の動靜を問はるゝまゝ、かく答へてさて回思すれば、梅と貧、櫻と病、それと定かに情趣の指しは得ざれど、おのづから一致せる者あるやに感じたるも、美名に就かんのわが悶えなるべきか。

○櫻は矛盾の花なること、このごろの半文錢にも記しぬ。濃抹なるもの、淡粧なるもの、朝なるもの、夕なるもの、其或時ははれんゝと笑ふが如く、其或時はさめんゝと泣くが如し。櫻は大和民族の花なるとともに、精神病の花なり。

○天は不束なる人間の智の、狂せては已むまじきを知れるが故に、たとへば流れの柵の如く、櫻を興へてこれを堰き留むるなり。殊に智を用ふるの眼を廻す程なる都人に論へて、一年一度の春の道上盛りを、この花の下に醉歌せしめ、狂舞せしめ、歸るを忘ると言ひつゝ、忘れ

もせず、安全に家路に歸らしむるなり。綺羅を纏へる男女の足を、上野、隅田に向はしめて、葉鳴、小松川より救はんとするものなり。即ち都のお花見とは、癡癡に對する年賦也、濟崩し也。

○爛漫といふ語の櫻花に冠せんよりは、狂人に冠するの的確なるが如き、好證據にあらざや。

○櫻咲く櫻の山の櫻花、常に斯くある可からずの戒むるものか、時々斯くある可しの慰むるものか。天意の窺ひ得られざるは、其深奥なるが爲に非ずして、平凡なるが爲也。

○人の天によらず知れる事は、形鶏頭に似たるを以て、鶏頭花と名くといふの類のみ。わづかに命名の先後を以て、出生の先後を判つのみ。

○計畫の十の九は齟齬するものなり。齟齬せざればまことの計畫にあらず。

○死して許多の財物を遺さんば、心懸げよき所爲とも思はれず。汗水垂らして不孝の子と、不貞の妻とを作るにひとしければ。

○行末かけて愛護の念あらば、妻は飽泣かしむべし。窮困は徳操を保たしむるに於て、唯一の方便也。道とはいはず。

○良妻とは素より夫のいふ事ならず、他人のいふ事也。利害痛痒の關係なき他人のいふ事也。責任を帯びざる評言也。

○某君の新婚を祝きたるわが先年の大々齟齬を、左に採録す。

妻は茶漬也、金を之に求むるは夫の非道也。夫をして飢ゑざらしめば、妻の勤務は畢れる也。△△君、味淋饜餅は一時のみ、茶漬は永久也。予は君が新なる妻女をも、茶漬以外に置く能はず、随つて永久に必要なるべきを信ず。

○制裁は租税の償ひ也、上より下に及ぼせども、下より上に及ぼす事なし。善には善の報あり、國家の理法は明白也。

○世態の日に紛糾に赴くを以て、幸福の誤解なりとする者あれども、實はといへば富の誤解なり。幸福と富とを、銀行に併せ求むるが爲のみ。

○心ゆかざるは人道を提げて、豪富の門に迫らんとする人々也。道義のなせる富にはあらじ。

○何ぞ同情を強ふもの、けふ此頃の忙はしき。

同情を惹得ん願ひの身も、同情なきを罵するの権利ありや。

○道徳の示す所は、氣根の表へ也。世は争ひの竟に勝つ能はざるるとき、道徳を唱ふるもの多し。道徳國は早老國也。

○老者の道徳は、壯者の香水に異ならず。

○僧の戒律を持するは、習慣を持するなり。これをも道徳堅固とは言得るなり。

○古來の道徳によれば、女の操は肉の操也。身をだに汚すことなくば、何等の處決も要せざるが如し。われはこゝにも節操と、年齢との對比すべきものあるをおもふ。

○あたら盛りを涙の窓に鎖ちて、赤い信女たらしむるに忍びんや。われは再婚を許すを不可とせざるも、其果の三婚、四婚を許すに至らんを遺れざるものなり。

○戀は野合をなせども、配偶をなさず。不朽は戀の働きに在りて、戀の働きに在らず。○これを戀といふも、色といふも、些の面上に印するものなきは、神意に出でて最も人意に適せる事なり。法律は行爲を罰すれども、意志を罰せず。貞烈義勇の女子傳は、修身書として高價のものにあらざるべし。

○勝てば官軍まければ賊、千古の格言也。この

故に法律も和姦と、強姦とを分てり。

○法律は姦淫を禁せず、されど墮胎を禁ず。

○われは法律に於て不通なれども、つねへのの見聞きに其一端を知りて、運用の妙の妙からずおぼえたるは、本夫の告訴に待つにあらざれば、有夫姦罪を構成せざる事也。

○怪しき夢を結びけりなどあるは、目前動作を敘するの辭なるも、未一たびも其筋の嚴命に接せず。偶々時弊を描きて、一二の名詞をつらねたるものは、秩序風俗を亂すとせらる。われ義に懲りて、今かく膽を吹くもをかし。

○信義に二種あり、秘密を守ると、正直を守る也。兩立すべき事にあらず。

○秘密なき者は誠なし、匿さぬ心事の洒々落落とは、少数のために多數を騙するをいふなり。

○事の眞實を語る者あれば、さうか知らぬといふ、疑ふ也。虚偽を語る者あれば、さうで有らうといふ、信ずる也。眞實は頭を以て否まれ、虚偽は頭を以て可かる。前者は打かたぶかれ、後者は打うなづかるれば也。世にもすぐれて輕々と信頼せらるゝは、うそつき也。

○得も行かぬに仰有るまいとは思へど、平生偽りに馴れたる人は、さりとして損も行かぬゆゑ仰有ると見えたり。

○五官はよきを反撥し、あしきを吸收す。視るべきを視ず、聴くべきを聴かざる今人の耳目こそは、生れながらに一類の弾力を負せるものなれ。

○食ふは本業也、言ふは内職也。口は開くべき理由あるも、閉づべき理由なし。

○師父のわが幼時を叱して曰く、食ふばかりの口ではないぞと。今にして追憶すれば、食ふばかりの口なりしなり。食はんものは、言はざる可からず。

○言ふ者ますく多く、黙する者ますく少し。問ふを休めよ、是れ何人の爲にするにもあらず、本人の爲にするものなり。

○折々は米の夢見る首陽山。われ義人あるを知る、併せて川柳あるを知る、更に併せて今の義人のたれ死することなきを知る。

○どんがらがん節の神髓を得たるものは、當今第一流の論客なり。

○花開けば人集り、花落つれば人散ず、あたり前の事ならずや。市内は何區何番地に住みてわざとにも何の里といはざれば氣の濟まぬ風流人とかは、へんな譯から泣いて居るものなり。

○寤や憂患の初め也、又終り也。字を知ることなくば、考へて年を取るわれらと雖も、今のやうに門なし、白き髭なし。われは世を恨みず。

○よき果實を収めんと欲は、よき肥料を下さざるべからず。人の衣食住を美にせんとするも、亦この範に超ゆるを得ざるべし。肥料は臭きものなり、穢きものなり。即ち換守の不美なるにあらずば、衣食住の美なることなきなり。

○おだては美言也、おごりは美酒也。美言を以て美酒を沽ふ、あいつ煽動して奢らせるは、是れ其略式也。武藏野の月の草に於けりし如く、口より出でて口に入る。

○尊卑大小の何れにありても、兎角に間取の住好からぬは、臺所と雪隠との爲也。この二つを撤するを得ば、諸人が家居の今よりも美しかるべきは、想察するに餘りあらずや。されども無意味なる人生の、全く無意味に歸するとも見えざるは、依然この廚と、廁とを存置するによる事也。

○斷えず春なる花の都に、佳人無しといふは之れを劇場に究め、公園に究むるが故也。ねがはくは今一たび、之を墓地に究めよ。

○命日缺かぬ殊勝の墓參とは、誰に盟ひの袖の珠數ぞや。逝ける彼人の靈を慰むるに始まりて、この此身の心を安むるに終る。

○信仰は誦經なりとする者あるによれば、宗教は死人のものなり。

○死者を送るを葬儀といひ、生者を送るを婚儀といふ。其穴に投ずるは一なり。死者は永へに還ることなきも、生者は何日ひよつくり還らぬとも限らざれば、近年の葬儀の銜耀に過ぐるに反して、婚儀の儉素に過ぐるは、これもかしこき自然の默示なるべし。

○遺言に依り生花、造花、放鳥の御贈與は堅く御斷り申上候。これを紙上と、門前とに對照するに、謝絶は或時勸誘を意味す。

○知れる者は知らぬ振、知らぬ者は知れる振をなすは、會葬人名簿中の普通事實也。死は一方に難有の友を失ひ、更に一方に難有の友を得るものなること、故ありてわれの既に世に告げたる所也。

○煮るだけ煮たる道德の果は、他人の疝氣を頭痛に病む事なり。學者に問へば極致とん。

○どうあるとても嫉は嫌、好は好、克己は貧乏神の御符也。

○元の白地がましぢやもの、悔悟也、昔の女は斯く叫ひぬ。元の十七にして返せ、怨恨也、今の女は斯く唄へり。

○あゝ正成よ、尊氏よ。起るものもあゝ也、倒るものもあゝ也。仰も欠も疝痛も溜息も、喜怒哀樂悉くあゝ也。世は嗚呼なる一感動詞の、いかに投入せらるゝかに就て、虎となり鼠となり、龍となり蚯蚓となりて、相搏ち、相のたくるに過ぎず。

○功成りて力の足らざるあり、力足りて功の成らざるあり、紛らはしき嗚呼といふべし。

○佛にしては之を佛に唄ひ、魔にしては之を魔に祈る。受験準備に勞れたる學生のいふ、自分にできるよりも、ほかの者のできぬがいゝと。さればなり己れを推すに先ちて、他を排するを今は競争と稱し、運動と稱せり。

○喜びは一人のもの、憂ひは萬人のもの也。ことを以て合同は握手に非ず、反目也。捉搦に非ず、衝突也。

○爲す有るの人にきかず、爲す無きの人に聞く

は、慎重の態度とかなり。流行語の域を脱して、便利品の域に入れる者。取て、告、史家は動を記せど、静を記さず。

○腰のぬけたるを泰然といはゞ、腹のすきたるを毅然といふべし。

○意志の剛健とは、ほらを吹く事なり。ほらは信用の大部分なり。

○そも噂は極端のものなり。正鶴を得ることなし。

○憤れる者は湯に入らしめよ、湯果て、酒を與へよ、肉を與へよ。緩和の功のや、現るゝを待ちて、女を與へよ。天地一切の理窟は消散すべし。

○二銭乃至二錢五厘の湯錢を以ても、人は快を取ることを得る者也。

○女子の來りて命を捧ぐといふとも、男子自ら警めてこれに惑はさるゝ莫れ。女子は世界の統計上、男子よりも長壽なればなり。我れ我が一生を短縮するの勇あらば、細君操縦策の如き學ばずして可なり。

○凡そ下手なるは、女の世辭なり。あら何處へ、行きたいことね、どうぞお土産を、順序は此三段に出でず。誰某の女が畏に懼れりとあれど、われは弱者を過度に保護するの、其折毎に非な

るを見るのみ。
○女ののぞめる親切は、ほんの口先、手先の類也。其飽くまで生理的に存在せるは、縱令すねても掩ふべくもあらず。

○見積、相場の善に對するを賞金とし、惡に對するを罰金とす。賞金と罰金との差額は、行ふ可きを行へると、行ふ可からざるを行へるとの差額也。善は惡に比して、價格大だ廉也。

○賞金の善者を罰することあり、罰金の惡者を賞することあり。

○節婦、孝子の志を渝へず、十年一日の如しと聞ゆるや、官はこれに金一圓、金三圓、高々金五圓を賞賜す。其旨の來る所は表彰にして、及ぼす所は評價なり。

○世柄には似ぬ奇特といへど、世柄なれば此奇特なるべし。忠孝は金錢に拘泥せず、故に金錢の如く通用せず。

○文化あまねき今となりて、金に買はれぬもの一も無し。若し有ればよくの事、買つた處が何の役にも立たぬもののみ。蛻岫や御室の花盛りに、臘氣ならぬ殿振を見せめる如き淫猥の曲は、士君子の聽を濫すに忍びざるを以て、音

縮オツなる三味線に迄、背公、楠公を頌せしめんとする大帝國なるを知らずや。

○因みに誨ふ、士君子は一物ある者なり、團十郎の如き者なり。耳にせず、目にせず、況んや口にするをや。唯やたらに胸にし、肚にするものなれば。

○金といへば直ちに多少を感じ、女といへば直ちに妍醜を感じ。是れ所謂時代精神也。

○藝妓が劍舞の廢れたる後に、女教師が柔術の興りぬ。

○いやな女の盛飾せる、むすめ義太夫にとゞめたり。われ嘗て之を評して、顔を赤らむるの術、鬚を振毀すの術、眼をつぶるの術、口をまぐるの術、自ら號令して身悶えするの術と爲せり。更に古作者の心血を叩散らして、鐵くちやにするの術なることを追加すべし。

○血に啼かば女よりも時鳥の事也。女の血は中將湯以下也。

○心に餘る男の熱と、身に餘る女の熱と、もとより發作の一樣ならず。合せ物は離れ物たるの理、茲に存す。

○いかにせば男女が情量の均一を保ち得べきか。保ち得ざる時はいかにすべきか。

○相譲らざれば戀は成立せず、相許らざれば戀

は持續せず。ミニとミニを取合せ、組合せたる自由結婚の弊は、干涉結婚の弊と異なることなり。

○天下何人か今朝はお話のお粥を吸れりといふを以て、相逢ふ戀の話題となす者あらんや。其ミニなるを否まんものは、乞ふ來りて之れを解け。

○汝を呼ぶは金の事、嘲世罵俗の大文字といふも、所詮は隠せぬ襟垢の併味のみ。聞く者の寒きにあらず、言ふ者の寒きなり。嘲罵せんよりは、嘲罵せられん。

○黄金を抱きて世を罵るものなきは、論理學上、矛盾、撞着の避くべきを、暗示するものなり。

○罵りて倒さんことをおもふは、優先者に對する策の得たるものにあらず。力を用ひずして克たんは、ほめく一途に褒め倒さんことをおもふべし。

○老物が死の其人の爲には悼むもよし、此世の爲には悦ぶもよし。たゞ之をして今際の舌の硬張りて、三寸の息のめでたく絶ゆる迄は、成丈樂地に在らしむべし。強ひて窮境に迫入れんは、

何彼と後のうるさきに堪へじ。

○若きより見たる老が仕種も、滑稽劇也。老より見たる若きが仕種も滑稽劇也。滑稽を以て、滑稽に代ふる也。代ふるが即ち生命也。

○這へば立て、立てば歩めの最愛兒が春丈は、同じ比例に親の皺なり。興がれとてや刻一刻、死に近くを成し長との。

○賺しだまして育てし子なれば、すかし欺して親に報うなり。子の親に預け、親の子に預けたるほど、物の不安の甚しきは莫し。

○金でも拾はねば分らぬが今の正直也。一押し押さるればわれら非力の徒は、金を拾ふにも人後に落ちざる可からず。

○弱者が手頃の棍棒は、強者が手頃の棍棒也。自ら撃つに如かず。

○必要あり、不必要あり。極めて明々にこれを區別せんがために、女といふは世に出で來しなり。

○さなきだに女の腐れ易きは、鯖の腐れ易きが如し。其ともに腐れざる以前をいはい、無論箸は女よりも、鯖に揚ぐべき事也。

○戀は二人にして、一人の事をなすと傳ふ。さらば片戀は一人にして、二人の事をなすものなるべし。

○京阪の京は西京の京なれども、京濱の京は東京の京なり。戀愛と婚姻とを混する勿れ、情婦と女房とを混する勿れ。

(自明治三十五年二月至八月)